

# ズバリまでも前向きに生きる

フリーキャスター 丸岡いずみさん

ポジティブで明るく元気なニュースキャスターというイメージのある丸岡いずみさん。

しかし、当初からキャスター、アナウンサーを志していたわけではない。

「学生時代に世の中のバブルが弾け、私たちの時代は就職の超氷河期と言われていて、希望職種とかどの企業に入りたいとかを言っていられる時代じゃなかった」

先輩たちが就職できない様子も目の当たりにした。卒業後、徳島に戻るともりはなく、採用してくれるところに就職すると決めていた。

「ありとあらゆる業種を受けました。入社試験は30社くらいだったかな。その中でアナウンサー職が全業種の中で一番面接が早く、フジテレビのセミナー研修を受けられる15人に残ったんです」

セミナーとは、1週間缶詰状態での研修会。キー局のフジテレビだけでなく、系列局からも採用担当者が見にくる。

「残った15人のうちの13人は東京に実家などがある人で、地方出身は私ともう一人、後にフジテレビのアナウンサーになる山形から来た武田祐子さん。私たちは用意されたホテルの同じ部屋で過ごしました。セミナーの最終日に、男女15人ずつが2組に分かれて、それぞれが役割を決めてクイズ番組を制作。結構ハードでしたね」

そして丸岡さんに白羽の矢を立てたのは、北海道文化放送だった。

「ほかに4社の内定をもらっていて、すごく迷っているときに、北海道からわざわざ関西の大学まできてくださって、その熱意に押されました」

アナウンサーとしての初仕事は天気予報の原稿読み。実はこの時、大失態をおかしてしまった。

「一生懸命練習してリハーサルは万全だったのですが、本番で焦ってしまったんです。普通は焦ると早口になる。ところが彼女は一気にペースダウン。緊張のあまりスローペースで原稿を読み、時間内に収められなかった。しかも、「次に釧路地方の天気は…」と予報を読むはずが、ここでCMに切り替わってしまった。

「慌てた先輩が駆け寄ってきて、怒鳴られました(笑)。視聴者からは、それで、釧路地方の天気はどうなっているの?」と数多くの電話がかかってきたそうです」

上司にも「こんなのは前代未聞だ」とキツク叱られた。

「あんなに練習したのに、とすごく悔しくて、トイレの中で大泣きました」

その後、経験を積み重ね、3年目に

会ったのが平日夕方からのニュース番組『スーパータイム HOKKAIDO』のメインキャスター。

5月5日の子ども日の放送用に、子どもにまつわる企画をとということで、ひきこもりを掘り下げることになった。

「当時はまだひきこもりという言葉が一般的ではなかった頃です。子どもを診察する精神科や心療内科、不登校の生徒が通う塾やフリースクールなどで取材を進めていく中で、小6のひきこもりの女の子と出会いました。彼女は家庭不和やいじめなど、端的なものに悩んでいるというより、もっと深く人生を憂えているようで、彼女の心の闇に強く惹かれました」

その少女を取材したいという思いが強く、まずは少女の通っている塾の先生に信頼されるように努め、その後、彼女を紹介してもらい、言葉を交わすようになってから少女の両親に許可を得ようとした。が、はつきりと断られる。

しかし、それで取材を諦めるような丸岡さんではなかった。

ただ、当初の目標の5月5日の放送には間に合わず、『ひきこもりとは』という内容で『今こういふ社会問題が起きています』と投げかけただけだった。それでも放送後の反響は大きく、上司から「シリーズ化し



たい」と評価された。

その後も毎週、車で片道45分かけて少女の家を訪ねた。

「忙しい合間に時間を捻出するのは正直大変でした。でも、彼女とご両親に信用してもらいたい、ちゃんと取材したいという思いが強く、必死でした」

半年ほど経った頃、取材許可が降り、少女は番組に出演してくれた。

「2年半ほど取材を続け、全部で約10本の番組を作りました。長い期間、取材を続けられたのは、悩んでいる子どもの心理に強い興味を持っていたからです。このテーマをライフワークにしたかった」

番組はフジテレビでも放送され、全国放送でも大反響だった。

北海道文化放送に勤めて5年半が経った頃、徳島の祖母が他界。北海道と徳島には直行便がなく、すぐには駆けつけられず臨終に間に合わなかった。両親も、その距離感に不安を感じているようだった。

「両親の退職をきっかけに、東京か大阪で違う仕事を見つけた方がいいかなと」

そうと決めたら行動が素早い丸岡さん。数日後には退職届を提出し、東京でニュースの現場に関わる仕事をしようと上京。まずはフリーキャスターとして仕事を始めた。「タイミング良く日本テレビで中途採用

の社員募集があつて、応募しました」

配属は報道局社会部の遊軍記者。後日、いきなり警視庁捜査一課担当に。

「警視庁捜査一課担当に女性ほとんど配属されていないのに、なぜ？でしたね。刑事から情報を得るために、夜討ち朝駆けのハードワークで、怪しい車を尾行していたら、逆に怪しまれて通報され、警察に任意同行を求められたこともあります。あの頃の私の関心事は、いつ寝るかいつ食べるか、だけでした」

順調に仕事を重ね、30代後半になるとこれまで猛スピードで走ってきたことに立ち止まり、興味ある分野の専門的知識を深めたいと思うように。

「会社のキャリアアップ制度に応募しました。認められ、早稲田大学の大学院人間科学研究科に応募し、合格」



# 眼の福・耳の福

interview vol.47

丸岡いずみさんの著書  
「休むことも生きること」(株式会社 幻冬舎発行)



学校現場で不登校やいじめなどに悩んでいる子どもとどう向き合えばいいのか、発達障害の子どもとの接し方、認知行動療法などを基軸に学んだ。

順調に進む丸岡さんの人生。しかし、日本中が震撼した大災害と向き合う報道最前線での試練が、突然訪れる。

2011年、『news every』のオンラインに向けて衣装を着替えているところだった。異常なほど大きな揺れが続き、エレベーターは止まり、壁は剥がれ落ちた。3・11。東日本大震災。

「その日は未明まで都内を駆けずり回って取材し、東京の様子を伝えました」

翌日は、上司から「壊滅的な津波の被害を受けた陸前高田に入って周辺の被災地取材もしてきてほしい」と指示を受け、岩手の陸前高田に。そこで見た光景はあまりにも凄惨で、カメラを回せなかったほどだった。原発の安全性を疑う声は陸前高田でも耳にし、特に外国人記者たちは不安でパニック状態。丸岡さんが詰め寄られることもあった。

2週間ほどで東京に戻ったが、現地で頭皮に広がった発疹が痛痒く、皮膚科を受診。しかし、診断はただの湿疹。

丸岡さんは3月の東日本大震災の1ヶ月前にニュージーランド大震災に取材に行き、4月にはロイヤルウェディングの取材のためイギリスに飛んでいた。

「100年に1度起こるか起こらないような特別な出来事が、矢継ぎ早に

起きていました」

海上自衛隊の護衛艦に同乗して、行方不明者の捜索に密着もした。護衛艦には女性用のトイレもシャワールームもない。時間も軸も一般社会とは違う。5時半起床で極度に張り詰めた緊張感の中で過ごした。

「海から収容されたご遺体を見た時は、人間ってこんなふうになってしまふの……と押し潰されそうな重苦しい気分になりました」  
7月。体調不良が深刻さを増していた。眠れない、食べられない。お腹の調子も悪い。

「人生最悪の絶不調でした」

心も体も悲鳴をあげていた。休みを取り、帰省。いとこが勤務する総合病院に入院。

「何度目かの診察で『うつ病』の診断を受けました。うつ病は心の病気だと思われがちですが、違います。脳の病気です」

ただ、医師に処方された薬を頑なに拒否し、大学院で学んだ認知行動療法で自分自身でうつ病を治すと決め込んでしまった。そのせいで、いつまで経っても回復の兆しは見えず、療養生活は続いた。

症状の悪化に加え、過換気症候群を起し、再び入院。

「入院中は看護師さんの前で薬を飲まなければいけないのが良かったんです」

薬を服用し始めると日に日に快復を見せた。1ヶ月ほどで退院。頭の発疹もすっかり消えていた。

その後、結婚し、代理出産で子どもを授かったが離婚。

「息子は離婚後も協力して育てています。自然豊かな徳島が大好きで、有明浜まで貝

獲りに行って、マテ貝をたくさん獲って食べて食べた時も大喜びでしたね。私自身がマテ貝をよく知らなくていろいろ教えてもらいました(笑)。YouTubeで見っていたようです」

「普段、都会のビルの中で育っている子なので、吉野川で遊んだり、絵本でしか見たことのなかったつくしが生えていたりするのを見るのが嬉しいんですよね」

現在は日本テレビ系「情報ライブミヤネ屋」のコメンテーターの他、徳島新聞で毎月第3金曜日にコラム『丸岡いずみのO.E. Street』を掲載連載中。また、埼玉県の私立松実高等学校の顧問も務め、2014年に取得した、メンタルケアカウンセラーの資格を生かし、不登校の子どもや保護者に向けての公開講座や、金融庁の通達に基づき、お金の正しい知識や使い方などの授業も企画した。

報道に携わったことで悲惨さも喜びも目の当たりにし、うつ病も克服した丸岡さん。どこまでも前向きに生きるその歩みは、多くの人を勇気づけてくれそうだ。

(取材・文/北島由記子 写真/永井守)

